

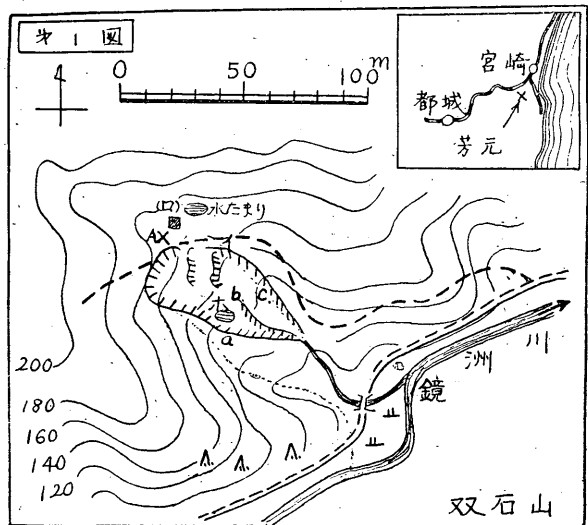
宮崎縣宮崎郡木花村芳の元部落の地すべり

宮崎測候所

1949年10月7日ごろから表題の地に地すべりがあつた。現場は宮崎市の南南西13km離れた山峡の部落であつて、U字形に加江田川の支流の鏡洲川に向かつて口を開いている傾斜地であり、その傾斜は10~20°で、山頂近くまで水田である(第1図、第2図)。

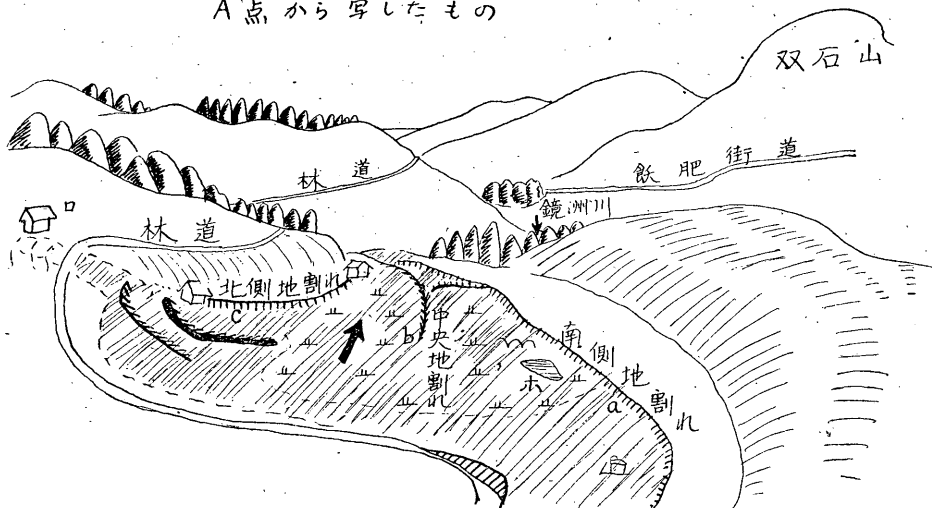
過去の地すべり：第1図、第2図によつて、(ロ)の人家の北東にあつた水たまり(田を植えたこともある)が前年(1948)から水がたまらないようになり、この下の林道のがけ下では、降雨時に濁水が出るようになった。(ロ)の人家の南側は庭で、そこに降雨時には水が噴出していた。この家から北西にのびる谷に沿つて過去に地すべりをおこしたことがある。

状況：地すべり地では、1949年6月20日のデラ台風直後に小さな地割れができ



第2図 芳の元地すべり現地写生

A点から写したもの



験 震 時 報

同年10月7日すなわち1週間雨が降り続いた翌日（宮崎における9月30日から10月6日までの降水量は208mm）、林道（第1図の（イ）、第2図）に地割れが発見された。この10月6日の地割れを境にして、水田約2.5町歩（2.5ヘクタール）がすべりおちはじめ、11日にはその高低差は3mくらいに達した。この地すべりの際、長さ300m（a）、100m（b）、250m（c）の地割れが谷の方向に生じ、さらに、この地割れから無数の地割れが網状にひろがり、田地は傾斜し、あぜはきれて、地すべりは数日間に6mにも達した。（ホ）の水たまりは地すべりが始まつてから形成されたものであつて乳白色に濁つた水がたまつていた。

なお、この地すべりは10月22日現在も緩慢続行中である。

地質：この附近は第三紀層に属して、砂岩、泥板岩、礫岩などからなり、これらはいわゆる青島層の続きといわれる双石山と大体同様な岩石からなりたつている。砂岩はこの地すべりの頂点附近および末端である谷川の岸にみられ、泥板岩や礫岩は鏡洲川西側の道路の露頭にみられる。そして、これらの水成岩はみな多量の石灰分を含んでいる。宮崎県の泥板岩を分析した結果は、「木村益水著宮崎県の地質鉱物 宮崎市の文華堂発行」によると、炭酸石灰（ CaCO_3 ）約50%、酸化鉄（ Fe_2O_3 ）約3%、珪酸（ SiO_2 ）約46%である。

原因：森林が繁茂していたがその伐採によつて、透水性の薄い風化表土層の風化侵しよく作用が急に進み、基盤との間にゆるみを生じ、水がしん透しやすくなつていところへ、今回の雨が降り続いたため石灰分に富んだ地盤はゆるみ泥板岩類の岩屑土が水に浸潤されて溶解し、その体積を増すとともに糊状物質になりやすいこと、および石灰岩が炭酸を含む水に溶解しやすい、などが今回の地すべりの一因と思われる。